

思考力・判断力・表現力、主体性・多様性・協働性を重視した「21世紀型スキル育成AO入試」



経済経営学部長 山本 啓一 教授

2017年度、薬学部、医療保健学部、経済経営学部、国際コミュニケーション学部の4学部となった北陸大学。それを機に、経済経営学部と国際コミュニケーション学部で、受験生の力を多面的・総合的に評価する「21世紀型スキル育成AO入試」が導入された。この入試の狙いは何か。入試とその後の大学教育はどうつながるのか。発案者である経済経営学部長の山本啓一教授にお話をうかがった。

教育プログラムの一環として位置づけられた 21世紀型スキル育成AO入試

「21世紀型スキル育成AO入試」は、学力の3要素のうち、「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」の2つの要素を重視し、これまでの知識・技能中心の大学入試では測りきれなかった学生の能力を多面的・総合的に評価しようとする入試である。その目的を、山本教授は次のように語る。

「本学のように、定員は充足しているものの、選抜性がそれほど高くない大学においては、大学入試に高大接続の側面を強化することが重要になります。接続が図れなければ、学生が大学入学後の教育プログラムにうまく対応できないからです。そして、接続を意識すると、大学入試は限りなく教育プログラムに近づいていきます。つまり、21世紀型スキル育成AO入試は、教育プログラムの一環として位置づけられた入試なのです。そのため、アドミッション・ポリシー（AP）はもちろん、カリキュラム・ポリシー（CP）やディプロマ・ポリシー（DP）を視野に入れた大学入試を構築しています。3つのポリシーを見れば、どのような入試にすべきか明確にもなります。例えば、経済経営学部のDPはリーダーシップ、諸課題に柔軟に対応できる力、広い視野、行動力などです。国際コミュニケーション学部は課題解決力、コミュニケーション能力、実践的な語学運用能力、日本語リテラシーなど、両学部ともにいわゆるジェネリックスキルの育成を掲げています。当然、ジェネリックスキルをある程度備えた学生の入学を期待しており、それを評価する入試の導入が不可欠になるわけです」（山本教授）

「21世紀型スキル育成AO入試」は2タイプに分かれる<図表1>。経済経営学部はコンピテンシー（行動特性）評価型、一方の国際コミュニケーション学部はグローバルスキル評価型、すなわち思考力・判断力・表現力といったリテラシーと学生の海外への関心度を中心に評価する。両学部が異なる力を評価する大学入試にしたのは、学部の特徴の違いが関係している。

「過去のPROGテスト^(注1)によれば、経済経営学部の学生はコンピテンシーが高く、リテラシーが低め、国際コミュニケーション学部の学生はコンピテンシーが低めで、リテラシーが高いという結果が出ています。まずはそれぞれの学部の特徴に合った学生が選抜できる入試にしようと考えました。私たちもそのタイプの学生が入学してくれば、確実に力を伸ばすことができるという自信もあります。もちろん、一方で、多様な学生が集うことも重要です。しかし、それは、一般入試やセンター試験利用入試の役割であり、第一志望者が受験するAO入試では、既存の学生の特徴に近く、より高い能力を備えた学生に入学してもらい、大学の核となる存在になってくれることを期待しているのです」（山本教授）

グローバルスキル評価型は、グループワーク・プレゼンテーション・レポート作成

では、具体的に入試の仕組みを見てみよう。

国際コミュニケーション学部のグローバルスキル評価型入試では、入試当日、課題に関連した資料を読み、アクティブ・ラーニング型のグループワーク（75分＋休憩を挟んで40分）が行われる。5名前後の受験生でデ

(注1) PROGテスト…河合塾と株式会社リアセックが共同で開発。PROGテストには「リテラシーテスト」と「コンピテンシーテスト」の2つがあり、知識を活用して問題解決する力（リテラシー）と経験を積むことで身についた行動特性（コンピテンシー）の2つの観点でジェネリックスキルを測定している。

<図表1>北陸大学 21 世紀型スキル育成 AO 入試

	国際コミュニケーション学部 グローバルスキル評価型入試	経済経営学部 コンピテンシー評価型入試
学部が求める 学生像	海外経験に関心があり、日本語リテラシーを持つ学生	行動力や意欲・熱意に富んでいる学生
マッチする 学生像	リテラシーが高く、留学の意欲のある学生	コンピテンシーが高く、成長意欲のある学生
評価するスキル や意欲	思考力・判断力・表現力、異文化や語学を学ぶ意欲	主体性・多様性・協働性
入試形態	グループワーク、レポート作成と面接	「アドベンチャープログラム」研修に参加
評価方法	成果物に対する直接評価	自己評価(+観察評価)

(山本啓一教授)

イスカッションし、意見を集約して 20 分のプレゼンテーションを実施する。その後、個々にレポートを作成し、それに基づいた面談が行われる。

「この方法は、教育プログラムと連動した入試であり、ここで行うグループワークは、初年次教育の基礎ゼミナールの内容に近いものです。今後、思考力・判断力・表現力を評価する入試の方法は、このような形式がスタンダードになると私は考えています。グループワークの際の態度や、面談なども評価対象にしていますが、リテラシーを評価するのですから、評価の中心はプレゼンテーションやレポートです。それらの成果物を通じて、情報をどう分析し、課題を発見し、自分の意見を明確に表現できているかを客観的に評価できます」(山本教授)

コンピテンシー評価型では「自己評価力」が大切 自己評価のベースとなる振り返りを重視

一方の経済経営学部のコンピテンシー評価型入試は、全国的に見ても意欲的な試みである。以降、経済経営学部のコンピテンシー評価型入試について見ていく。

大学入試当日は、受験生は約 20 名ずつのグループに分かれ、屋外体験学習プログラムである「アドベンチャープログラム」研修を、午前中 80 分と午後 80 分にわたって受ける。他のメンバーと協力しながら、課題をクリアする中で、コンピテンシーが評価される。

コンピテンシーはどう評価するのが妥当なのか。山本教授は、前任校の九州国際大学で、文部科学省「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」(注2)の採択を受けて、学生のジェネリックスキルの育成と評価に関する研究に携わった経験を踏まえて、以下のよう

<図表2>評価基準(ループリック)

評価尺度	レベル3
1. 対人スキル(お互いの努力を最大限に評価する。自分を含めたメンバーをけなしたり、軽んじたりしない)	
A 親和力	参加者全員が気軽に話しあい、相談できる雰囲気を作ることに貢献できた。参加者の失敗を責めず、努力を褒めることができた。
B 統率力	様々な意見が出た時に、すべての意見にきちんと耳を傾けつつ、全員が納得する解決策を提案できた。
2. 対自己スキル(自分自身で挑戦レベルとその方法を決定できる)	
C 主体性・積極性	自分がどこまで挑戦し、チームに何を貢献するかを自分で決め、それを積極的に実行することができた。
D 感情制御力	自分自身の感情をコントロールできた。思い通りにならない事があっても直接的にぶつけることなく、効果的に伝えられた。
3. 対課題スキル(課題に対する有効な解決策を考えることができる)	
E 計画立案力	目標を実現するための有効な計画を具体的に立案し、提案できた。

※レベル3のみ抜粋

(山本啓一教授)

な知見を得ている。

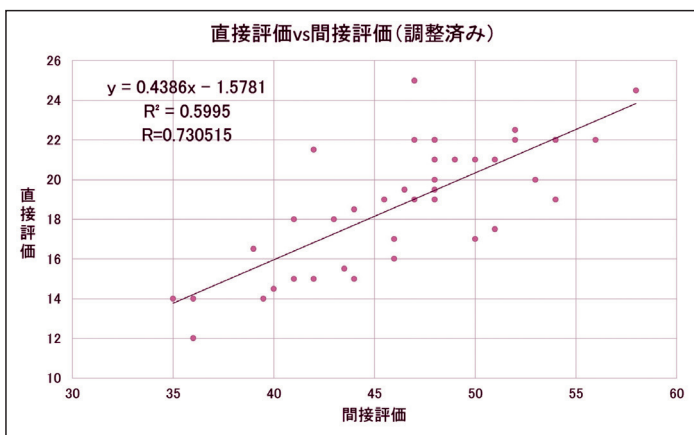
「学生のコンピテンシーについては、教員の観察評価の割合を大きくすべきではないという結論に達していません。職場の上司と部下の関係や、小中高のように教員と生徒が毎日顔を合わせている関係なら可能ですが、週1コマだけ会う学生のコンピテンシーを教員が観察評価するのは困難です。十分に評価できるものではありませんし、無理に評価しようとする学生は演技するようになるからです。むしろ、コンピテンシー評価で最も大切なのは、学生の自己評価力を高めることです。メタ的に自分を見て、何が不足しているか、次にどうするかを考えることが重要なのです。ですから、『21 世紀型スキル育成 AO 入試』でも自己評価を中心としています」

自己評価による評価のため、受験生には事前に評価基準が明示される<図表2>。親和力、統率力、主体性・積極性、感情制御力、計画立案力の5項目ごとに、3段階のループリックが作られている。受験生はそれを意識しつつ研修に臨む。研修中は、教員4名、職員4名が観察評価を行う。研修後はグループで振り返りを行った上で、一人ひとりが「振り返りシート」を作成するとともに、ループリックに基づいて自己評価をする。

「いわゆる高得点をめざすのではなく、自分のありのままのレベルを適正に自己評価できることが大切だと伝えています。自己評価が高いだけでは、合計点が上がらな仕組みになっていません。教職員の観察評価と、受験生の自己評価や振り返りシートを比較しながら、評価者が面談を実施しますが、あまりにも観察評価とかけ離れた

(注2) 産業界のニーズに対応した人材育成の取り組みを行う大学・短期大学が地域ごとにグループを形成して、地元の企業、経済団体、地域の団体や自治体等と産学協働のための連携会議を設置して取り組みを実施することにより、社会的・職業的に自立し、産業界のニーズに対応した人材の育成を行うもの。

<図表3> 評価結果 PROG テストと入試結果の相関



(山本啓一教授)

自己評価の場合は、当然ながら面談の評価が低くなるからです」(山本教授)

入学後の調査からは、この入試の狙い通りの学生が入学しているだけでなく、評価結果の妥当性や信頼性も証明されている。

「PROG テストの結果を見ると、この入試の学生のコンピテンシーは、スポーツ推薦の学生より少し低いものの、他の入試方式の学生よりも圧倒的に高くなっています。しかも、リテラシーとのバランスがとれているところに特色があります。また、PROG テストのコンピテンシーと、本入試の合計点を比較すると、相関関係が高いことがわかります<図表3>。この入試できちんとコンピテンシーが評価できていると自負しています」(山本教授)

**選抜のツールから接続のツールをめざす
課外活動のポイント制などで
コンピテンシーを高める意欲を喚起**

この入試は、その後も学生のコンピテンシーを高める教育プログラムが用意されている。そこに魅力を感じて、「今は自分のコンピテンシーに自信がないが、大学に入ってぜひ高めたい」という思いで、この入試を選択した受験生も少なくない。

注目されるのが充実した入学前教育だ。合格した学生には、入試結果のデータを開示した上で、今後、どのような力をつけることが大切になるかを考えさせる。そのほか、「アドベンチャープログラム」による仲間づくりや、グループワークを通じて資料を読解し、課題を発見して

レポートを書くスクーリングなども行われる。

ポイント制という制度もある。オープンキャンパスのスタッフ、学園祭実行委員、地域ボランティア活動など、さまざまな課外活動を行った学生に対して、ポイントを与えるというものだ。この入試で入学した学生には、年間 20 万円の奨学金が給付されるが、それを次年度も継続して受けるためには、一定のポイントを得ていることが条件になる。

「コンピテンシーは、授業だけで伸びるものではなく、多様な課外活動に取り組む中で高まっていきます。入試の観察評価者に職員が含まれていますが、それは課外活動プログラムには職員が関わることが多いからです。このポイント制によって、学生たちは課外活動に主体的、積極的に取り組んでおり、それが他の学生にも刺激を与えるという相乗効果を生んでいます」(山本教授)

さらに、当然のことながら、育成するのはコンピテンシーだけではない。初年次教育はむしろリテラシー育成を重視している。例えば、1 年次には、資料を読解し、ペアワークやグループワークを組み込みながら、レポートを作成する「文章表現科目」が必修だ。「ゼミナール」も 1・2 年次必修である。1 年次は現代社会で問題となっているテーマ、2 年次は学部の専門性に踏み込んだテーマで、担当教員全員で作成した共通のオリジナル教材のもと、資料を深く読み込み、ディスカッションしたりプレゼンテーションを行う力を養っている。

1・2 年次の「ゼミナール」は、通常の 90 分に、リフレクションを中心とするキャリア科目として 45 分を加え、合計 135 分で実施している点も特色である。キャリア科目もゼミ担当教員がそのまま実施する。リフレクションの方法として 10 分間スピーチや、1 分間動画の作成等を行い、これまでどんな力が身についたかを自己評価させ、次のステップにつなげている。入試から入学後の学びまで連動し、接続していることがよくわかる。

北陸大学では、この入試の導入によって、経済経営学部ではコンピテンシーの向上に意欲的な学生が入学し、活気が生まれていることに手応えを感じており、2018 年度からは、薬学部、医療保健学部の AO 入試でも、模擬授業を踏まえたグループによる科学実験によって、思考力・判断力・表現力や主体性・多様性・協働性などを総合的に評価する入試が導入される予定である。